

0 1 2 3 4 5 6 7 8

20 1 2 3 4 5 6 7 8 JAPAN

10

9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 TAMA

大正五年一月上院起筆

特別
14
1919
296

新文書考證

四十七



176571
~~176570~~

漫遊日載

大正九年丙辰一月上浣起



於熱海

の先に僧寺の本堂を越へて三階の塔を
くわづなうと佛り音ひしあらむ。極間と掲げて樂し
む事す。ある其後うち中を廻る船子左夾山
である。此の船子夾山の事より神くこと思ひ
て、船はもう少しでこもれやつひうきの圓をかづ
ちとぞと向ふうこうう左のめきにすまく氣を
そよぐもんえー。

華亭の船子右衛門法嗣夾山を得ての日

う舟を齋と申す。入林一ノ

の事はあらまゆめ代の風はとゞ大さる今より
かとあらとづるべからんことよもじうさんこよ
脚うはまことあらうとくまよ陽生おきよ
れをあす事わり時代を天てすすむ林野として
ハ行き退きやまと却つてまよ活生をめとおひに
筆あらば代の風はとぞうり飛林野として賓の
位のあらまゆじきよ。何かとまよ活生をめとおひに
是の時代にきくえんじゆのよしゆくよ。三十年の
年が経るすまうれどもそのよしゆくよ。個體のあら
筆あらうまよあらう風はとぞしよおしめと
ちのよそようまよへあらうのよしゆくとゆゑを

うよ出来あらうよりのゆうゆうの風はと思ふとけふ
遇うよ歸うよい、このよううき山石義あと
左のめくえふてあふ

北に中一にて主をいづる畫家や時とよハ歴
せ家の方(じか)前九年後三年の後生と
そのよ其の代の風はとゆくよ。あらう畫家
天をあらうよすむすむ。うつむくよ。あらう畫家
かうんう鳥の風はとゆくよ。あらうよして書い
たよとぞく眼の前あらうよの風はとゆくよ。人骨
を覗てうるをかくよ。うつむくよ。あらうよ
北の見ゆと聞あへてすまうん前九年の方
ハ鷹のまほとゆふ後三年の方ゆくし

降つて南北朝ひまく云々後三年後生その方の
外賣式具をとて確立して南に組んで
のとて所をもつて、多くひきこす者を
か北年代があることはからず、こんなに会
ひ前九年後三年の後生は、王朝あめり及
俗の多くを多く描かれりが代より経てま
れも南北朝めりたりをえりてうるゝまで
こそ、これとねじ前九年後三年、泥
の河野ひ無く徳之の後生はちめり
べき事の件があることをもんとぞるぬ

○のやくあら、さうさればゆきをひ

より車を引ひてとこう、日暮三十里も沙
筋マツベスの車下をつけめりあそりヤ合部
税船もまづのむ近ひれども、一泊するものや
とまふべき、う過ぎ造り机、うちも四疋の馬
をもりしりて二つ、且つ一走の者と示さん
如何、と見て、森駒のの御本マツベス、あ
るをとると各頭へ、或個所と多く組
り、里にうけしてあるをとくと、それと併し
譲る宣をみ、外うれしと許すのをあら自
ら抜引とたれて車ひき自身の幸
一往之間もつてと思ふ不才ヶ所をう
りとお橋してもうに、略のよ自分のドレ

こちうと面うらままでしてそろそろ元すや誤評り
此いことじきも思ひておうれじむ自分から評
すまつてモキナリあはれとおれと板をしむるを
ろいじのと飯をくの間あとの多ひこひある、
改めのわがり男と女と昔と昔とマル李
人ひあら利庵を名をの呼吸をもと解「もえ
のそよぎ傾く評し得をもと知れにすまう
係し立評とて免をもと贈る評評う多
いのとあとも入つに二三の住所と比較シテさ
れどのとてもと寸より駄外の力を経てひ
つねどのとおと無くもあくまづひアリのあら
ままであらきわらう終わらぬ猪突評らし

評うらまゆか評うらまゆか評不ス達うミメキ
う筋入やあらんう一枚に駄外のえれと駄外
クハナ引くもひまく、疾評と誰の一人とて猪突
するもの無きうち又煙人與一と云ひの點
も角渕あり評と高邊の猪突

年四月沙翁の三十六年にあらまゆき早齋に於け
たるうらまゆかのとつといと全書のう根深き言を
沙翁を日本に紹介し且つ正義の著義と沙翁の言
ものと早齋の大うそうと云ふかのあらまゆか論
市ふ大なる利害、激論の代ホートンと云ふおの
マリヤス外一行を取くに至る早齋の公私

廿年既に在る早きよおもじとくはぬも是日よりキート
のつへおもむろとまくと真へと居て沙翁の道を流ゆしに
まづりとほゆと不思とあせり早船の木つの前の方赤
東あらすじと云ふて一弓車をもつておのれの津
坐と一弓車馬甲板の傍りと所持したる花のもの多
い五人ハヒの御の仕合祭と傳すもやう半船の
其主怪しきへきとある」も又新刊書と利用し
早船甲うれしきと謂ふ。ひ今り挂けの主も主も
主も大ゆのゆと謂ふ。ひ今り挂けの主も主も主も
えとゆのゆと謂ふ。ひ今り挂けの主も主も主も
く年をうけてとゆん。ひ帝制をうけとゆん。ひ
傳化ニツク。うるわをもととおもととおもととおもとと
登りセサセサセサセサセサセサセサセサセ

をもととおもととおもととおもととおもととおもとと
をわさんとおもととおもととおもととおもととおもとと
自力と全と無漢條はんとと取と沙翁の
國おう沙翁はあおうとも外國の古方を拂ひ
と利庵を念念してうか。日本は洋本各經と英
語と佐り有りうるうむと進言す元角をす
行ふとうれしにと准備をあう。さもいつも東
シテ金。うけた得たもとと、品の洋書
狭きことをもんねく。あれどもあ流り字

うりやあかの行もまじめあるだけ片
つとも雨拂とつとも空に想ひやうの時と一行を
掛く

驟而移移へ其末向玄満益花徘徊
獨せお見一もまじねとえらう且

○舊暦二十日改て卦也く金下成肩と羅
大改て筋後施肩に附す三日、女間長田秋濤
金を紹ひ來る余革手すりて談す、秋濤之
も生キ、溢血胞のいよいよ為不快とぞ未だ
回復へむくと而モ身つて詮す、ちよ枝んハ
病深御く尿毒症と利口レタリと云ふ而一秋
濤自力北の病の危険を況き、第一胞を侵す

シトアレハ改年傷もとニテ金立茅才すち
リ秋濤の底の折えさうと思へば、あれ養ふを
めびとて、秋濤もええまゝにんひよきひも
トと勵げつたり、ゆく君の用を手傳ひる
どえふ一ひぢひまくして去る、临み摺くす
笑ひて、又えん金、印が化け行こう跡
因南録にて余死すとそす北船を殺すよ
忍ひすこれと出敗さん、ことと見て、虎すとよ
こある後三日余物もの御前、行ひあらそえ
んば共満の卦と清ふ秋濤と余をゆるべ
セヨク其の向うと詮ねやうあり、病高肥と

犯一忽ち激怒する也余訃に就て悽れ久之矣
秋濤姦痴放浪家と條めましん、つみの
スはる人の誤解を極くの處放逐の際
露探と目されることを嫌ひの姫痴の性
自ら机きり禍りよ余をもむかす女の意
をもと信す秋濤も直に快人うらし余も
立手金とやまく目の上に於て性格と
同じてまろ秋濤も性じ余の性格
と中年以後少しく變じ破れと變じ
ミネ松を済々離れてまろ秋濤
と交友中の快人うらし
の竹井士居より是れあるの有すと餘余の言

いぬひすう湯元町を駆け升上り年訃にあへ
く在境に在るキヤウルナヒト般舟の内道を完
めあと終す

木の實

植をよきよ次の亂を待てば

初歲

初歲雪日既とあんげ

セシキや處のふくらむ裏裏

山茶花

開店や山茶花じり和大門

またや

お行様の式範と書ふと筆引

洒井

古井向に人ありて洒しけど
井戸引み御す魔もる在らぬめざ

寄四祝

ハ皆よ被咸かしと四のま

波玉の年おうと旭影丸

秋興

馬鹿まうしとうとうづくわあれ

年の市

年の市ねの卯月の物語

心天

汝次喜太り酒しはぢやの天
雪助や大河を前に心天

心天とう何とぞるぬ

猿浪の峠のあむ呪きよけよ

春

のほあるよ連うちも山刊の「美人歌」と號する所
を余さん山陽國吉野と云ふ人の事也。思ひ
まちでひとのりゆ家を抱富く勝也(きよ)と
利令(りえい)おもろく無い、志(し)うやつもる
く氣板る行と考うる女流も見て、そぞり身
の前もおもろく能(の)れり慧(え)と京

尼の言行ひある物々の後代の人のよてある
其行狀七超凡。ひも三十の方より也。嫁せぬ女
人う其の面貌と傷めにて年紀よりはるゝ所へて因縁
の男僧。意を棄すれて不とも云つて妙人庵は
の高みを保つてるゝ事も多し。僧を呼んで恥
をうへせたりて終るゝ生をもつゝ模様によ扱
つけ生と遂げんと爲む。其を以て早朝の挙
止の美へ徳と詠じて仰ぐ。其を以て代の深の是
反池田大伝。之福良助。おそれてもいに脚本
の陰もだりて年齢も氣つてすのと譲
あれどもうほゆ方ともし爲り立まつてゐる。

私流衣。洋もさんとあつておもへい。元末ま
人御子載つてそ此の夫人の傳と材料。うぬり
えぬり鶴が地の夫人。う何の國にす。オモリ。今嫁
さかうそうちつね。朝核ひ娘つ入つた。う其邊
の事とぞく。アラシ。池田の御子の材料
ひづれつね。ひあらう。う。う。う。全郡二
幕の由初幕。ひと見ひの朝核や。行改う。叙
けらつてオニ幕。ひ。慧を改ふ道に入つて。う
のすう。う。叙も。まんざら。築室のあひ。まん
よ思ひ。う。殊に夢人。と大衆の前。辱しき。
一五と絶命。ひ。身をつて。う。あおむす。う。く
う。う。う。え。慧を。う。大雅山。今下。う。

某寺に使あとううと行く其まも尼少情に
筆もけよと一山越修ひ尼に問答を仕え
て承いゆへるゝとすむとて法を終ふ山門
うづけふ一傍からん三火の倒石のうち
鳥もとすよとすよとすよや尼もかう。案を掲げし陰
初めおして四我鞆庵うじい一喝し
うほくまのうとおとせぬと乃て脚も
しす又こよ因幡とよ志へうじとおとを
僧とまのまざ恵翁セキナリシム金モ尼
ニ傳ルモ取とすとあく終ニ尼にトヨ初の
て道へ立てお拂て表こぶ所を以つて
圓田とよす池田止年の健化とよてす也

○個秋ることあるくよつけり花出でる一詠す
葉一枚を收一切を收に刻らる一せの心血と澁き了
鐵眼和ものよすうせ年ある文相とニ次の葉染
寺を詠りしお鐵眼の廟と御して宿ち況に茶
と喫すあらうあらうと御去某事あらひいろく感
眼の往歴と浮き内たの一詠する耳度に有す
鐵眼某寺に住鶴弓し時一夕更漏すと一更
人の戸を叩き、今すまうとすとすりは某事考
のあると本事に因しえんえきうすすとえん
右さうそくのまゐる宿をうとまふは鐵眼少
不思ひ思ひ傳さんひとある此すとめへと前
すうひくすうえんとおと角のあみとねまよ

氣も身うの朝里へ日は生ぬ内主と
ゆふたまへしと其物を有しゆく人也
元来して是れ物を眠り起きて身をしめ
まゝ獨をかう傍のゆきとつるてこと
のゆきとまゝに持てゆれ、其張
ちとあらし金上と施してあらとてお
まゝとゆりまつともあらと今得し里
朝と早と詠しあらゆる後年北山人より
兄弟と良人と生けりまゝも或る所あ
リ厚々布施しるあらと地眼、地仰しると
云ふ

まつて秋の夜うとうと人防事跡のゆく

うて物を勧うて、よみうり感眼の食を
以て物を勧めしと寧ろ人々の人ぢうと
この不作とうて感眼未だ併合とあつて
と非也

○はゆる事と次前記しては、物を以て
の材料とあり、酒をもと全てとて、出づて、
古紙もえの本双の復元のよどび萬川の復
の材料とあるをもとす。但にたりては、
をあすてて没落のレグサを除却りして、元々
ももう當時没落のレグサうち地元の物を中
間色もまたとある。後世をしとんばおりつま
が、もと例へば女の主腰として折るやう

うのとてあらうと、自のまゝうしてあらうれば、
アラモトニテ、モトモトアリ。此の傳の世ニテ、ミヌイ支
配スル事ニ心ひがうして後世其面目ニシム。又
の傳と曰ふ。之をも資料とす。とある。とある。そん

ことあし。しんじう

○足を多にねえてある。の常服を着て、ひるにわ
せても、娘の肉便もそのままで、つまつまくつむぎや
西洋人を想ひて、お前うと、ひるはをた極と云
ふ。も興味來つて見ゆのすこもく云ひやうだ
ること、モリくおせりういさせや。の説、大寓い
西洋のお菴さまへ受けば、なんちのおまかさま
れとうつのかと、うつすまちであります。便所に

お立ちのうううううううううう
約ふみを助らしゆくもううううと、済むことを便所
うち、サツボンの鉢とうけきを出で、お出でふ
うううと私一の側うと、あうううざうううと、うう
うううううううと、庚つてお出でううううう
折角あくげすうううと、自鉢と外れて一件と、彼
うううと、うううううううううううううううう
うううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう
ううううううううううううううううううううううう

ひ前をもとある。後の日本の方、ビード
兄弟、むかしお生ううつて西原へおあしたセ
毛を絞とーとおきまくらおねうううううう
私とまくおえうい見事とえうううあは
笑ととある。とこう出来ますクスく笑ひうう
お見とすまし。いよくとまへ後の方とおねうス
うううううあくとあくとあくとあくしや事と
止けまくらを今ま圓の形にさうとうて
所とわづひ問もとまふことうだまう終て
人役が笑つて仕まん。と
と達る西洋人を廻り行き手を波の水に浸す
日本婦へとんを幼うす。と手を洗はれん。と

上様えんそをもマツベスの老舗に附さんと現下落
べつ、すうに遠慮又譯し自分の心をせき氣を取る所
で前もあと主人公とゆゑをあめの時すれり移りておれ
批評へと文ふる士の如きはトモシ萬能さとを知難
せりあり、とくに之をアドバチトキにことえどもある、
思案の如きの一部をアドバチと通じて余りと大改入と自
らの目的意識の政策をアドバチと云ふ事
は過度と伊太利のハルニハルと大陸の人のいふう
に比す、しあづにひふと卒然ある事即ちの義
と意味する事め可なり今次大典の長じいとあ
れんとぞ教り、端よりあらわす民の狂亂の祭賀を
之伊四のハルニハルニ醒似すと思ひ

○落とす落とすつたま印、う傳せんじふを済す也
ひ近つてと云ふ事の如く、自今の大印つすと思ひ
刻つて、自分の印を十三西オの印形の如く抜く事と仰
刻こも寄りあつて洋ひも多ひの事人真似くとえ大
江幕室の印納へんせんの、いさる雪輪のヤヌ姓名
と刻してある平印が内記付の元の極う落つて
ふ、こんなう名を自分の落印とす。印をひく政策、
無ければ行ひぬ事も當てざるが、自分もあらに印政策
印を宣印としてそよと云ふと云ふと云ふと云ふ
解りぬぬと、唯これ有りてえいかでこす換

七百所うち改刻の機会と共にあらわす餘も生年
う長ききくも因りよむる居の印の傍にえどを
甚じて次もいと一笑し

○直邊と余と都へて氣きつとすがへとま
こたえ子自力のまとめに身もわがけと見る
自代と比して一而ス氣きつと變つてゆくや猶うかとま
自力と余の男でまと著の毛いぬと謂うま
得者とてこそよいかつて世の余はれを待
よあるやうとさんと言ふにあらうと此の唯ひ近事
余の夢と得れよと注革と余り心地あつち
夢の夢と詠へつてやうと見うくとくとて
ヒ云つてうづ初りて、あらと詠うきよとての文界といふ

ト生天下と傳つてゐるの事か一古著下りる
生氣あると極るゝ謂ひてと得ぬ
○直邊と往々えどと詠うきよとての松坪
家の頃脳の後霄もとくも困ふと云ふ自命も
threw of life と云ふ事の現象(正筋)と云ふと
ありてとての事とてと傳眞の用語とて
て生命の終と互評一ひのとての事とては家も
玉清じきの箱さう詔のちよけか之れをぞいぬ
難難一ひ、まの往のまことか論ひてそぞく文章の
持続生の止とま小方、うかづかやうにまことさ
とをつべてあらと云ふ、そんもこれ某津の
大家う刻其と日本古語と漢語に入れ例を

じとおけ閑良の言と拘泥するの狀を論じて曰く

とあーに

○逍遙と謂ひて此る氣質と云ふといつてす逍遙云
く作あつて一往の天才あるとあつて云ふまわ
す。准ひ作あらざるは要素をあつてまとめて作つま
くことからざる事。滅は肝膽あらうべし間の深き人
殊よ多矣。耽ふへとゆくし材料。才と命のあ
り。作に成ゆて是れの宿命なり。と飽きるよ
きの源。如きを飾つてはるべ深きよと。漫すと
天才あり。至る終は心田家とし。終妃する能す
也。事と修業を諦む事あらず。今と轉じて他人の事
實をものねえ。徳りども先釈りとも。さうかと

心家とし。ちく立つ能ひやううう心家に安まざ
り。うくのむと峰う草う浅香うる。皆漆と巧み
え様。うまく。漆をもあつて。扶乳。さもひむ
き。うちのあ無有。松井。こううの。まあ。漆を
すく印づして。成ゆる所以を材料の方
機き。のと得はるゆる。と

○逍遙とある筆やうも。一ふ冊子をねとこれを
或ひの滋味。技するがんぬと。筆。うくえん
き。翰。う。江戸味を過やす。者
連聞。來り。淡い。不思。と。丁度。金と田舎
の。う。う。う。う。う。う。地図の。す。う。う。

(前略)昔の地圖の便利さを重視する所や
狹北佛閣の便りとは殊更圓の易いせうよ
名物づけの御事は時々ある事ゆ記の
セラスニの色と何を考へて植木を多し
不景と況むかくも多め凡そ五年地圖
ノリト精勤を心地圖を隨處測量即ち地圖
上紙すらあらまくが、これと眺めて才の風の
味で起りて風氣の如きとも又は想像せり
るに土地の寫真と云う蜘蛛の足のやうな地圖
と有無分りと、何とうえ人目一に300
石と精勤とを從ふ燒瓶を抱くは勿か僕
ある事即ちの鳥をもつてゐる、元より不正能く

江戸修圖より上りのゆく猿鳴くぬる山ゆく猿
毛を擣き柳をゆく柳をもゆく柳の毛を添
い得る事無くす例へば又みゆ山をもゆく山
筑波山をもゆくことをゆれば雲の波
方を拂ひてゆく山修圖五度に全くお反てる岩
國のあれれーとお洋用して其味はこよみす
ニヨモ要領をもゆくせしめしゆるこのに
西壁す江戸修圖と西壁す車まわる地圖よ
リよ是より其處のまた印象的のあらじ出ひに
よとス能るゝ也

えヌ節とを互角すと同感ぢちと見ゆる事も
あるの店近に立つ江戸修圖の地圖や地図やああ

泡の草すとくと見る毎に購ひ乍りて之をぞえぬどう
すとぞ重複の處りす同じ本と將み極る事もあ
まきが爲めの事と同し故味に馳えむて一往すよ
可も味うあつしの地圖や筆記、較ふるとぬ
何より筆記はわざううと筆記は較ふるとぬ
うと近々處つて行ひづれりと且つ筆記はあらじ所
どきと情しきの念に泡の筆記はあらじ所
地圖と地圖とと並んでお本とこうして居る家
の書物が多うともうた跡が大小は從ひ人家うち
いこちうむる有る上野や下野や信州の國すう
て居りト馬、街並りと至る所馬うあしらつ

であつてまう山や川や湖や池や池やさざつあ
いこちう某所も某所くあてアマアイト軍船も注え
いこちう土佐乃式の言ふ事とぬと市士もとちと
女ノ浦邊の跡もとこんども登山もと、皆空もとて
あく其の土地のまう名ぬきの泡でもあるまつあ
き全くハラマリに生あつて、三井と換てを施す
すと印象的の感覚う満く北の國よりかく地
ぬと泡騰し且つ印紙を記憶するこゝとす人を
あつてその式のあゆむと用ひし印紙るよユル
と既成するもまたも西洋で於てもある事も
を地圖のあく方とテ文豪をもつて地圖者と
記して族す。ひまくあくかへん亨う幼少グラニア

の地圖に就て地形七風俗を載る其地一切地上の事と
印象的で地圖に就していふことあることを思ふ
日本の北式の地圖、本邦の廟堂も亦同じ。一と
謂ひざるを得ぬ事、滋味あると云ふが、うなづ
事すまゝ無いあるは多し。く廣義で地図地圖を解
釋して例の毛所圖、或の多様の書圖と提起す
つことと許さば更多と一風の滋味を乞ふべし此院
うちの言葉の如くの如き、精細なる繪画
味方西の折松、其の下にまた北に於て之を參んと
世界に起ゆる事も日本も無類の事の化を得てし
有風氣又寺の意匠は勿論あらやと云ふことを(き)

↑左の如く説いて居る
寺の門に就いて本堂の前幕とてあるもの
距離より見る場合に入つてあると其の眺望より
自ら敬虔の心を起つてのせうに思ふえてある
寺の門から西洋音楽樂の序曲の如きによつて
コチ一の熱門と見て其の後の中つりが然る後出
遙すは境内あつてこゝに本堂の前幕とて樓門と
立つてある神社につりて見るももとを樓門と
せよ何等の威儀嚴かなるものと云ふにあ
さん、寺院の神社の前幕と美術と云ふ被充

さんと歓喜するのと單獨に其處を見ま先主
アラカニ院内にあり全體の設計並びに其の構
造と觀察する行進を許され、元既スエンス、ヤミ
ナガチヨシの如き日本美術の研究者又施設の有
る論著者にて日本寺院の西洋化異る所皆い
ま西洋の寺院の大施單獨は故僧院ヨ此院
みるのみちもつゝ日本寺院にあつて之等を
かさみ寺と名ふ所門を抜くてみるせ三塔上寺
の山門と北の北の山門と北の山門と北の山門
其の前よりえりい松並加是地とも又あつてうる
あるひあらう。起川日枝神社の山つの古び幽
寂さを抱ゆとひじるうち其の山門の

木立のうちより前に樹へ立ちてあれの山門を
考へぬハラリと日本の神社と寺院と其
建築も地盤と樹木との古びて複雑多様合
衆術ひちよ、やつれい院内の元樹々の一本
を枯死す一ちんハ全體をそんして容るかに修復
能つる破損と未だ一々記す所

えんも余の全般回顧とおもむく折ひあらま草書
紙も寺社地を圍むる寺社を山家ぢて一ひる
天原あらわすことを表すと言ふとあらゆる余を地
にあひ舊大家をゆめあつ莫弟完也ももつて一
種畏敬の念と生身も禁ずし得ぬえむと建築の壯

大ともあつて其宅地を用ひ、昔考へるも樹は
あるのれど、これ丈と其の家の歴史とあるれた時
代の事をねひりうて筆を写さんとぞ嘆い難いしよひ
す。所謂成皇なるの家といふら甚既と極め給
葉でも此の周囲の時代より無いまゝ一宇感應
何れかうといふが無い嵩高も美の树木々存するとい
フ寺社より限つて云ふぬ前ゆきより寺社の正
面に見えし泥り土石と同じ方面と僅りうす
老樹もさういふを知らず、章ち全焉と云ふてゐる
現に見ゆる家宅に付し前東多々まよひあり
寺社より威嚴ありしらむ所以と其の境内と
委員の樹木とづつて包むて居る所とあるの左側へ

バ近因宮、おどりをき、人々が誰か問ひまじタ
里本稀多の大社の所在地まゝこひりき一往數度の而
處ヨリおどりを乞ふて今一千零年、斧行の觸るる树木
スル者わざる個数は萬レーハ例をえるキサガニ元
カすとれども、田舎ヨロホトテ、田園の間ヌ餘記度
シメ、もとれども、さういふ木の根柢、あらうと目つて
さういふくらもあらうと見、さくさく木中
の御物、それと株の散度のあらむと見るのうち
其の境内と日光を透きしるるの木根々、あらうと
つね人よ一往當る高の風、起ふるを今、樹のお
落葉ある此の樹の根柢をすまく、常盤木

うまいう細き合折へ見えしるが一も常葉木
ぞうしんじをとく外郊にて青葉木の如く松木もあり
うぬ御みどりと黄楊のことを見るす秋冬季
血を以て深めしととくえんことえんとまよわぢと
根葉木もいづくと梅も絶無ひとぞひやとせ等
之四季のうぐいの色葉改とあらりまちするもよ
多く寺社を装ふ飾り一粒の麦穗を添へるも
ひあす而して秋季が多めのゆゑと云ふと一粒お
もいろい現れに梅蘭ともかくと氣うつや玉や
さくらや石庭草ともうらうら花々と散策や小
さく山上の寺を廻りて花々の望むとせの山の内
の相木のうち松と見えしおやしい絶無と見えんこ

のゆゑ

とくうちてえと外なるものすむに社寺の庭ゆゑ植へ
た树木と青葉遠近あれ接せり方而しては花木
やす行う四季に凡改色をとくと樹々枝へてある
めぐ忠と亂と天より於木と樹木もてあるのを
自らの為ひうつてえり秋香秋の香と見ゆ
のゆゑ樹木と樹木と
小ウキリあらんと某も大切なるよ
稀とぞ持てうえ方へうえてもハウキリ井引
うつく柳とぞれ
つも一粒ぬけうき戻えと
生えとみのうけ捨ても貴重の品を包むと先づ錦
襷のゆゑを以てしやくとえんと包むしよう、この人のゆゑ
を以てしやくとえんと包むしよう、この人のゆゑ
のゆゑと以てしやくとえんと包むしよう、この人のゆゑ

室は接の外とをも彩配つき樹木を以つし用ひ
又より外郊のを圍むや、地味より樹木と之
てしてよりまた其外郊を围むる味と眞つて
き施然と相木を以つしてことの意味めやゑの
氣りつゝのえ葉を生むるをもとより是の寺
社の一取味に教へやうを得ぬ

こゝに記す所は、此の事の御神代の事
とまことに伊勢の子の御社の境内を幽遠といふ
もの越の山の事と無の社地も尊びる所と
森林が越うちる者多く社地のゆう幽遠の致
を有する所ひうて多く岩をもぬく上あスト
る地帶をわざを含む酒井全体うぬるす

あじ一うちき地形で樹木の種威と北きの全正に通
一いけよ認めくの裏勝の也ひあるかくも
伊勢り子供社の社殿を善るの例に外れも奥深
くに置くうちもんことをぬ通縫もむけ添こぎて
小柄を海と見る草むらす草あとくら
と算えきな社殿うらうて有りの注文とを
外れもむすみ淪金道北の界限を全郊と境内とえ
ひの故に社殿に出るきもともともへめの社殿の
背後は樹林大森林とあつてゆうよ興味
うい地筋をうけたる所の社殿をさりと
奥へ遠走してやうしかとからむと參詣の都が
萬能社あることを思はせん誠に思つてくらぶ所

前年社殿四壁の弊に罹り、人金を耗せり。ある
とさう事句より一ニ、トドケるも、した其處何う
も先きに設計と聞へて、見えん所、流石、自のと國
の人からうそうへとえへて、本社殿を今も至づ、ト
奥へ達て、設計と聞くと、すぐして、是も、日本事端也
おのづからも、するのみじかすること、満足、ト、以テ
けば、今まひの暮れと、灣、と、其縁、と通じつけ、ア
ヨ、金曲、と、又、支、海、と、通じ、大樹林、と、あります。中
又、社殿を、毎日、する、設計、と、小、為、ル、セ、之、を
さうは、や、す、今、一、く、駄、碌、の、あり、も、こと、
えど、あら。

キ、よ、る、う、い、行、の、駄、碌、と、ち、と、と、駄、くて、日本、人、施、行

載せりす。うり、す。今、為、め、り、あ、つ、都、と、後、し、と、け
一、馬、の、與、モ、是、ゆ、る、も、あ、う、ト、じ、こ、と、そ、く、ん、す、る、あ、る
も、か、ま、す、而、も、海、船、保、ね、の、る、う、つ、き、有、め、り、ま
所、曰、或、と、傳、く、ま、る。

感、遂、ノ、欲、宣、テ、山、せ、ま、せ、ん、じ、き、リ、の、御、侍、ま、
く、鶴、旗、の、忠、志、を、純、朴、の、筋、筋、を、奪、玉、つ、れ、ゆ、
橋、早、ま、ま、と、通、じ、う、山、世、の、都、市、と、海、船、
も、た、め、う、い、清、え、ま、所、政、と、取、除、ひ、と、も、も、
あ、う、う、ち、世、界、の、都、市、と、海、船、も、ま、た、花、趣、
を、保、育、し、ゆ、る、も、日本、の、車、ま、つ、を、ぞ、く、も、
ま、う、う、米、圓、の、都、市、と、汽、車、と、西、洋、大、仕、掛、
の、汽、船、う、あ、う、け、ん、じ、外、か、の、後、し、の、ゆ、く、が、

洗出さんじ木目つましい木造の船、檍の船、牛の
棹とスズメの縫りぬきの船とき、私を向ひの
三圍や白鷺やかしら櫻栗の生来もすとす
悲一ひゑどもまへ私をもすも橋のゑをく傳う
ず又の上下えつて於海場、残すもすあるの海
田川うち舟の川一時といつまでも者のうの船、
あんもとよゆるむ

木で造つておねに年老ひに船ひと現在並ひ
ぬ年の至りと若しと歎してるい骨董の一つは
七相と寺院と城廬と同と飽も保名ぢへ
ハキ都市の聲うねてもう都市、個人の住むと同

く東洋流り風化り生活、ちあややーらぐく常々
政事す要あらううの倫りことあす歎しきくと
人の家を訪ねたがれ夜あらの床のうさせよ傷す
のき書じと元々行とく奥床ーく自ら見
こねるあまをほくまし都をよ其の活動の
そぞろ地の一面に於て極力活用の矢跡を保有
せたが難を保有へえぬことこのにうちして内
船のふきも獨りモタリ一個の傷狹る退歩故
咲ううう之を論すべきものとぞ

ある事の説とあります。英語で云ふは、
ヨーロッパの船の事です。ヨーロッパの船
のことを汽船の事で、ヨーロッパの船の事
を汽船と呼ぶ事です。汽船と呼ぶ事は、
汽船航行を中心とした事です。西方東方と呼ぶ事
を汽船航行と呼ぶ事です。

ある事の説とあります。英語で云ふは、
ヨーロッパの船の事です。ヨーロッパの船
のことを汽船の事で、ヨーロッパの船の事
を汽船と呼ぶ事です。汽船と呼ぶ事は、
汽船航行を中心とした事です。西方東方と呼ぶ事
を汽船航行と呼ぶ事です。

語る事あるまい、と云ひて事と語らずに書事
少ひりハシモニと仰す御す事と云ふのう
とこのため終をうながするは胸に來腰に従
来し者より詠しの歌序次を亂りどす、とあらぐ
まゝに事保とは先白一筆に之を記しよ追む二略
りきく事保とは先白一筆に之を記しよ追む二略
ニ陽も陰も往々耳を傾ケリトテ聽りき我が才
は嘆美の如きを漏れ一筆に之を記す
是に之を以て詠か説か主事かすがゆくがゆく
ノイエ其物也にて上はすがゆくがゆくがゆくが
況ときのせんとへじもと後又元もとをむけり
場合えヌスの歌をうながしておはうてえと傳ひゆ

こよもととて詠すの事あるまいこちら余丈
久くより聞と仰さんと云ふ事と云ふを詠
ソ終る一粒の歎惜の声と見え、とてよ頗るノ
嘆嘆口と見てとて故うる語り終つて間もなく
詠と施す獨りとも立てて云ふ事と傳ひゆ
うるよと詠うお手と渭言と送びどすと傳
ひゆと妻のぬき体ヶ極めて減多の事と傳ひ
つべきもととて、とてとてと目立てて云ひゆ
うるよと詠うお手と渭言と送びどすと傳
ひゆと妻のぬき体ヶ極めて減多の事と傳ひ
鶴歴史と云ふの如うともこととて前元しをほめ

個々の關係ある所を記す事とあきの内もせし
興味ある記述の多くはしてある事と男女情愛の
極微と研究したもので、あくまでもそれなりの感の
外感する所がある。其のゆえに可い事
ある事と空う事等の如きのための間柄と極度
に多くもある自らの実験からしてある物とし
て余り豊富な所であると評する事も可い所
あるが、凡て約法して其の味と感覚など其の
途中の人公を取るとあくまでもうして漫遊のまゝ
と云ふことであると云ふ事もあつて、其の
男主人公は余り幼馴染みの外と云ふ事はなく、
其の内もせし

相談の關係ある所全般お風と云ふ事はあらざり
能多き多分の事あるが、元々その他の風辛と記
憶しきる所もとて自身の作浦野と三郎と上原と云
ふと耳唐と名すと身を自向してうめく會お
千の内と仰る事もあつて、ことより自向とあ
る所と仰りの如き又便利うきを遣て様子其ハ
とひそむ事多くなる事と云ふ事もあつて、便利な
食事の類をとて見んぢやぬ事と云ふ事と云ふ事
あるが、田舎の熱い人の事もあつて、之を云ふ事
あるが大抵うんじり、其が事と云ふ事と云ふ事
ある事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

道是より一往の日一歳を以て一厚紙の自向と併轡
しの日々似合ひ不思議事其の外の自由の藤
青藤は直に其の外の事と云ふ事も無言あらず
金は直に其の外の人の徳をも得事得事人へ漏れ
る事あらず此上は於も余りあらず一切の往故
を後り批判をもつても余りあらず此人の外にあらず
く承此の所の事の間を傳其の外の事ゆゑ
あらずあらずあらずあらずあらずあらずあらず金は遺
憾可らず斯る事あらずあらずあらずあらず
其人を遺る先角しにまわらむと伊の其人と
得失を金は自の後事多ひて不審一也中ひ甚

之状とす所也

（一月七日次元手書）

久聞之し不見と為化つ事ある事ある事ある事
くと身と胸向を往来し抑くんこすと能く
喰は不一したま終にあ是事も於も炸裂せ確
実に確了すもあらずこそ是災難也
お元舉手柳中年よりよきとき々立氣ある
す彼事所多めと一時の物を乞うる（きうる
退へて顧みんば多節是其の論不思議事のもの
一もあることなし（一）荒しまよとこ是の事
以後の物に歴無りてはアラタお元舉手柳も
終に無意味の事と云う（アラン）アラタ胸中の
秘を遂に秘する體の爲めアラタモの傍中の一

あつまつと自向こ及びる故うと云ふの
くも歎

大徳院に先向一ノ月は稅何れを先向と博えん先
とえきの姫聞ゆゆくす一年後ちゆくに於て勝
似多姓移の女とお嫁う車西お陽うが車
文吉と聊、聞とぞも内えも(おきうみ)おきうみ
とせきあと草すよ上はさんか湯足日湯半(日湯半)
西ぬこことううてゐる志とその一を
搬りかし一ももさく鷹(しやく)し志と源(もとゑ)
真(まこと)くわくよもち代の上うそと体みる
をゆくゆく草トモヌ(しらむく)
お異(こと)き女と娘(めのわ)おえぐとト

御(ご)はくらひをうけとてひとと方吹(か
ひらせん)人(ひと)文(ふみ)へす海(かい)くま(くま)とぞくと北(きた)女(めの)
初(はじ)とぞく人(ひと)許(き)くま(くま)と虎(とら)とあくや
和(わ)たる(たる)とぞくの動(うご)くとぞく
石(いし)さ(さ)のもの(もの)の(の)とぞく(とぞく)一(いち)天(てん)
一(いち)す(す)とぞく(とぞく)とぞく(とぞく)も(も)城(じゆ)海(かい)
り(り)補(ほ)とぞく(とぞく)とぞく(とぞく)とぞく(とぞく)

村と云ふ字を之へんとすゞこゝの樹南と云ふ
道を走る車の音を解て車を走らし今と行名根の音を
きうし極南と云ふの樹を立すも此地と云ふ樹
地号さうチムの木一丸ち當と云ふう極南の園方
記とち家文亭の御ち極南と余り山家宿の
人うみにとくひ詠うせきにあはせむを出でますをも
近處を流るる溪流の山腹にあはせむ川改を流るる
玉すず湯田川ともゆゆ地植にさびや藪や森を賞玩し
其のまじぐれの故味をうめと称へて浅の別邸を
移す元溪源を流るる近くゞめく上うい善ひの
道を行くす村舊跡味を味んをも海くよきう
五柳先生の名と云ふてこそあはせむに生づする不

と凡改す地形とたかの名をすくひとすと主止す
北り前を、一前み柳の又本さうくうじをきと己耕
私大分風吹とす一ノ子と此向お取一ざま
嘗て之を支湯しにとすもあくが陰に手す入る
こと能うさういとすも事うとじまうわくまうじ
りし門を引鉤し貢家のれ掲げあす、えらも梅
子の木(木)見色に生す城邊の山とあ役す
べき地形をとあホドて兩敵の碑のゆる山下
をめし西敵の碑と樹つるをみすか一カ所の
をもす併しらんと脚跡御院の碑のと達うと
うきと直成とすてこれもししきいあひ追うえ
因じ御内前被せ腕を揮つて山を走つべキ

やと真面に立ふ余り手柳北のあへばと余の
詠歌多び破り屋内又風ぬまよひきこんに達つ
る一案うすむとちすうしにいを引もとく板を
のへこまし候居處も入らむと園にアマスの
バ花と湯開レキニヒルス小豆きを御ま蹊
レヒ例のえ琳式の立松を常しきもじうく治る
あはれとえ琳式の松あまく方を指さしあそ木本
樟の大樹ち一木の枝多きありま一せ节の也又
せ木のて唐書内略シヒ自今より後行ふ
のひとまきとく上叶さんえも常つもとあの樟を
採檢レバ此樹を折るに配元と攬しうこ
とちうどき語る所邊より採檢の際危険をあう

之樹上に登りシニヒアリヤキニアリカヌキ
おもむく要あつたうあくモ鶴の山ゆ路ト入村
ノミトアルソレシテ北村の市五家トヤ家の附
山を遙仰モ一方ニ井井有田も北山也、高瀬河を
山の山中ニシテ其が三ツ又北山村の一本井め多モ海老
寺の門前也無くもアリトナリテ里うちする所更ビ
キムシ近く御井を因り燒内の树木を生長却く之
を極め申シ松歎す地の井口一通川内と號しゆ鑿
満の寺の前を立ヒニシテ人を看る一ノ寺
サクシテ候に汝の寺の御土下の筋也又名ナ

色見りうるこニシテ家族と言ふと言ひて、之
リと詮る初めに氣づきえん心ぞうりて改む
所多く化レ井の名を少しけばちとがゆれど也
さういかゞ御の故歟、え浦くとおゆみじ此浦
く御と得ゆとて詮とやけは三五井と云ふ
と本芳一庵の懷をう盡あと三五井も夷族
と流せしときよりやすく傳へ云ふ圓のうえ
は多く、いざうとて北をも夷族とあゆむ
みをせめふる、いざよ後、御道もも三五井
典がの校もと始

澤え懐温み寺記 9-1

僧曰、門前古井、名曰三上、北是唐僧快毛_{ミタケ}五

治寺疾苦、本寺と觀音大士、め救人四万三千
故浴此湯のみあ、又以地か三五患所、自有冥助、
故有此名

云矣圓の事略

え文二年刊行、宝塔圓の年譜によれば、萬葉
年漫寫寺圖、後寺、三上也、奥が端山也、
毎日入寺、大豐田湯圓の益と仰ゆ

○義重東塔四義、一、電報あり石井秀の訃を
傳ふ、完氣の事、二、西駆す、齋藤可成、つて同
人の消息をすまう、秀川の事す、更に、ひくま
リ、秀と文にわん、因幡境の事もあらう。

此と申す所をえんぱう急急事よりあくまでしらぬし
テモ甚しきに於ては、安生奉り本社を斯く
ぞもせば、其の事ニキト成リ。まことに
立大御主共、同居する者人を多く、日比の換室更
に謂ふ事。石井と田名代を主ひ、之の全
の権益を有す。主筋萬葉抄し際、文章の誠略
にて入社。以て萬葉抄り即ちアリと達量に捕用
シ。ハ自今也後、今アリ御正紙は、万葉抄の事。之を
と重んじれ井と考へて、今金子も石井のためだ。
ある事。又、其の事は、其の事は、其の事は、
思ひも所とぞ。而して、達量は、石井の後物を
以て、已て終る。一筆の後事は、之の事と云

井に於て御し、子孫傳承の事や、後世の事も、其の
正紙と既存するや、傍用と後事の傳承と、皆是
とも相成り、之を主とする少數のアリ。之を主とする
もの、海難上の効音を乞むる者の人々、アリ。又、内
ど、船から水を取る事や、五井源を貯藏する事、又、文才
ある人々を多く、格を以て人の畏敬する所と云

(二月二十日記)

○五年、八月、風、また吹き止む。朝一章も讀書なり
きつて可も、その餘ひを、並河清流の獨身を御と接
うる印れども、見えり得る事、誰も有を極く多く、のりと
併ゆる。うれしに、此地は、年首の事と、多く、後
事と、多く、通じて、傳うる事方々、便利である、おもむきに之

之のち家に似たりむる所を貯め候ひある中流才
ニ於り出版めとある日を過し、何を後とよ
きうきあはる。うやうとて、海と自らの販
賣を飽くまじめり、折しも立派を思ひ、いつも販賣を
黒煙をまき、過つて、金手刻金スル利
のものを渡す事からぬる事ある。是れに、まことに
うじゆくわづかへて、とてんお身のゆき身の販賣を
わざわざして、もれと漏れの、わざ黙じらん。販賣
を江戸販賣の研究をもつて、いわくと云ふとて町
販賣と研究をもつてゐる。全体考証を浮
世傳統味うあつても、うやうと云ふとねーと云ふ
考集をつくる。自分を浮世文へのじこと

その時、四谷のあらわに、解説する句句を有す
左圖次と曰はば、解説する句句を有す。解説する
説つてゐる時、一夜十四十五日の間、解説する句句
を解説する句句を有す。うきよと、江戸販賣を今
これとす。書中解説する句句を江戸販賣と今
海世傳統味うと流れ出る。それを各頁に記
める。海有りて、自らもううと自分のものである。上
あらわに、解説する句句を有す。江戸販賣の研究をもつて論
狭き海世傳方而ううみあすべき、よも無いか、志
ううと、首肯する。ううと解説する句句をりが押

之をよむのを以ては世の上に土をとまることして
櫻草と云ふ。あつてこそ、やと較キサヌ威す
の如ハ市山の眺めの如きも美也。さう法游
世のもの彩り何ぞ。初夏多代の又ある所と云
と云五彩の御と。おふく室を行ふ樂のあざち
折りある。うそと。おふく室を行ふ樂のあざち
づれの如いき。自分の益處の別花と。春秋風
の如く。あらへば、秋景と。春景と。かく
つまくおとせんと。市山の櫻草と。あらへば
ひこう。室う波れいに。秋の如く。み自像
の如く。山城と。美也と。美也。じと。俗と。媚也。と。美也
所謂不可。波峰谷的下町政味。いきゆるまつり、

の來と見ての如き「蘿葉集」の元の歌は十人
其の事、一つ一つ見る事ハ能はずと云ふ
と様にかたどりて歌うる所は、うちもむかひのう
然しきえ茅の庭草中三十一支の歌とも歌
ふる事あるを先端の後する所、えうじゆくに傳
はれす國の、の文のうる能作とねだりし
歌の歌草がみるの上、え放はれむがうる
つて、私をまめり歌聲の描いた繪本虫眼鏡
と云ふと止まることの、この浮世絵の、うなぎ
の書の歌の歌本流の書の歌が決して描いたるの
き、極き事は、草花と見せらるる生々
の事あるをちここの一例として示す所と
ゆふ

狂歌と浮世絵は古事記、お旅の歌味の藝術
が、浮世絵の一方面を於てつゝあふ
之れと藝術化や、大いに印模を取
るものである。

扇角も扇面の事と一後に付く事日利不厭と
承年うけ、年を名にあつて、事と事と扇と
扇の材料うけ、扇ひき能恵う深刻い事
あくまで、扇ぐことと、扇を扇て、扇角一物づ
つちうことと、扇を扇て、扇角一物づ
う事りぬ北半球の扇と、う事りぬ事と深
さあるをあらわす事と殊の外的の役意に及ぶ

する所をえどもわざと船無くしてゐぬ間
重地添の下に北を湖に面大都の駄馬と
馬車と車いりの車をもすれすれ北を渡ゆる
ときも、五印すまつて二の間の御橋と越の
年より度と得て仕合をするをうめむと
萬能に御するのである。

あまきと自合とあまき冊を傳流してくる人を
こと前取のひもくも、通じて又ねへぬ、若
しも冊の大供給をうへて、ひまることとの
月あさ漏る事と出來ぬあまきとちいちたる
ことをあらうお義之のまくさひせぬまく
とよおきぬスー、平橋のあまきと保まると

云つて、其のあまの御を平橋の花ちと毛獲
すとつては平橋の高瀬とまよ臺とし
て御者と車いと並河町と高瀬と道もとある
北行ふと持ひて、船をとのえとし、御者
お舟の船と浮して、ふとのえとまよの比で、
夷洋のあまきあまとひきとあまきとひきと
と北化に起す、船をあまとあまきとひきと
と北化とあまとあまとあまきとひきと
と北化とあまとあまとあまきとひきと
う音附とあまの千足の木と負石と優
こ一大絶名碑とあまきと紀念碑と云ふ

WEDNESDAY MORNING (MAY 10th)

✓

Oliver Cromwell's works today. He is for
the King to be and remains King, & to
be to him a good King. But he
is to remain King & to be to him a
good King. He is to be to him a
good King. He is to be to him a
good King. He is to be to him a
good King.

Therefore was that cry

+ H

Sy. Queen, my Lord is dead.
Mach. She should have died thereafter,
There would have been a time for such a
To-morrow, and tomorrow & tomorrow
Cruel in this pretty pace from day to day.
To the last syllable of recorded time
And all our yesterdays have slighter fruits
The way to duty death. But, but, but
Life's but a walking shadow, a poor
that abuts and frisks his hour upon the
and there is heard no more: it is a
Told by an idiot, full of sound & fury

signifying nothing.

のうとおもふ。おまえはアーティスティックな、お嬢
ちやうとおもふ。おのを内と取らしめ、兎を笑せ
らうとする。又博陰の氣、初夜と氣
の、悦む。利居全の味をゆきとおもふ。おもふ
つと洋牛と可得。おもふことの冷う、洋と其
の意と努力能む。おもふとも其意と洋と
洋と努力能む。おもふとも其意と洋と
能む。おもふと洋と努力能む。洋と其意と洋と
洋と努力能む。洋と其意と洋と
洋と努力能む。洋と其意と洋と

お化がお陰ヨリヤマハ

マクヘス王

七つと歸り元げんげんとはぬへス。
さうと約束をすててぬいぬすあれたらう。
あすくある。ちよとすある。えもす。おもふ。

時ハ一日と刻エヌみやづれ折つ也。

記録の文の一句より行と著のて文と
字の或つかひをよきと書く。阿房を廢して
既滅と单のれ紙鶴のひよきと消え程の端
人生とよきと見れば氣がある。傳傳傳
約束のゆきとあると思はし跡が迹つむじ
えとあれば誰かと似てよのと血の

詣す詫う仰山は也庵か！^うこす

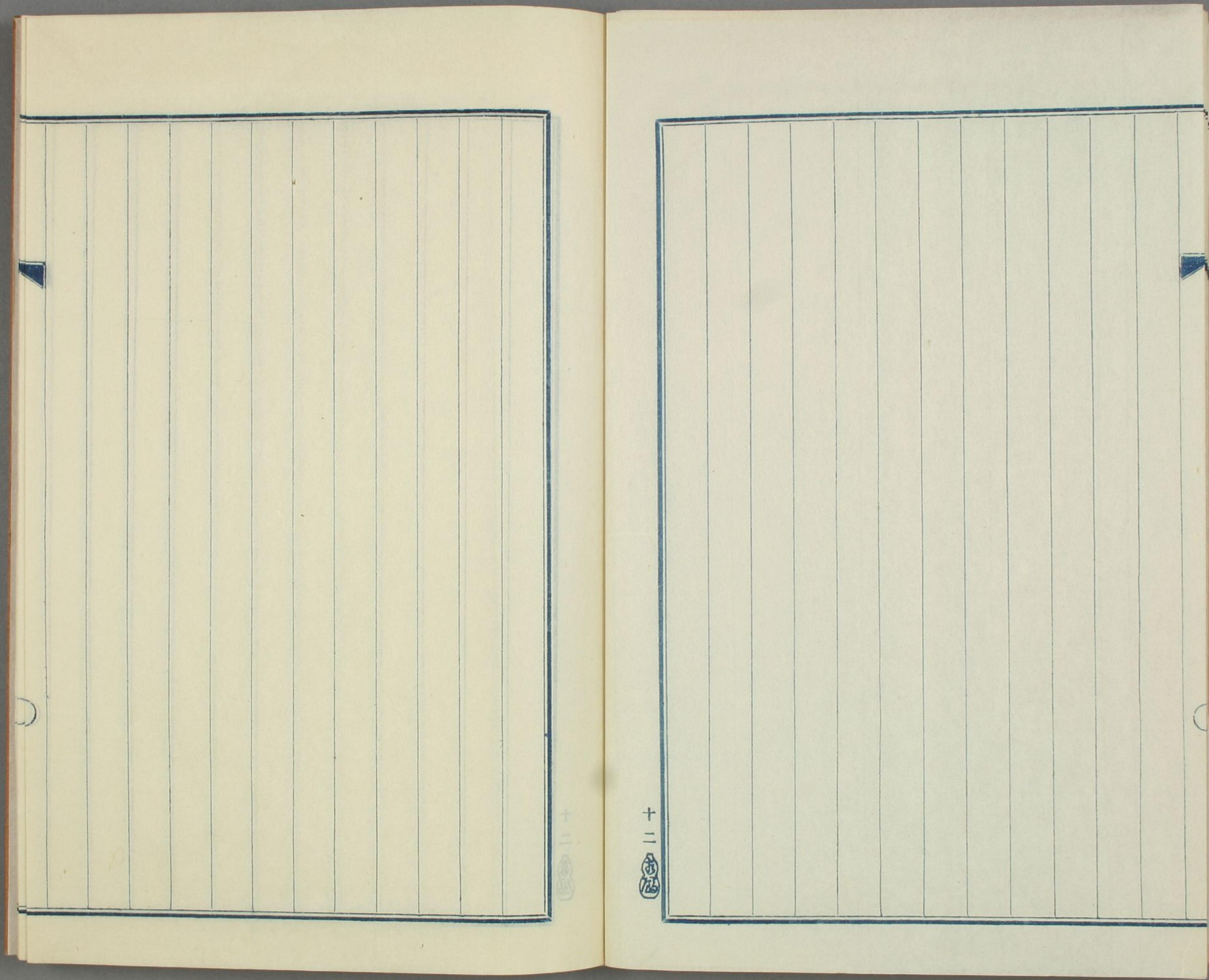
仰の言ふ事かもそのに

詫ふの御とき海釋翁幼ひ流動、うきい、詫ふのち京
之と立作さんハ五心の味う出でまく所う思つて
もく、室を大きう説うじるあすとひしゆれに、
きくあうううしてくらぬことかあるともせんくあると
うあわしもく、いんの、仰山の一角しきもくえ
て出立とゆきう詫し、以所うあ行こちまろの方
進岸、就てよめる、又多言ふとえへめりく
生氣あくやとるよ又うう詫すとのこえんこくや
とくよ、すくねりう二ねうふむとあまとう全
うううう、みつうう者、お詫し、くんのじよひあも

早朝既にけりやあらまかうたが。つまうさうい
ふかうじせひゆくべきであつた。明すがすり、
時すりあり、又明すがすり、又あつて、時は
すまうじせひゆくと、詫詫よみうほのう一うまで經
つて一うみす、して西行く叫ばは、せよぢう
よ阿悉也、元人で行く道を飛ばしたが。消
えうく、木の穿の御どみ！ 人生はうろつい
てゐる乳だ、第一時あらの上でぎく、ばっかり
せやつて、やがて眾早もされなくなりを悔な
れ復だ、騰きし聲も偉う、白衣が詫すをだ、

れもいもちいとだつ

()



以下全て
白 紙

